

2025 年 12 月 7 日 待降節第 2 主日礼拝メッセージ

「神は決して諦めない」

牛田匡牧師

聖書 エレミヤ書 36章 1-8, 22-28 節

何日も、何か月も、それこそ何年もかけて、取り組んできたことが、何らかの理由で失われてしまうということが、歴史の中ではしばしば起こります。現代の私たちの身近な所で言えば、コンピュータの中に保存しておいたはずのデータが、気付くといつの間にか無くなってしまっている。削除してしまったとか、ファイルが壊れて開かなくなってしまったとか、それこそ保存をし忘れてしまった、などということは、私を始め、どなたにも経験のあることではないでしょうか。

それこそ、コンピュータもなければ、電気もなかった時代に、紙に長年にわたって書き記された貴重な原稿の束が、焚き付けとして誤ってかまどに入れられてしまったなどという逸話も聞いたことがありますし、また大雨や火事で失われたりすることは、決して少なくなかったのだろーうと思います。さらに古い時代になると、日本文学の世界でもそうですし、聖書の中に記されているものでもそうですが、「『〇〇』という書物に記されている」という一文があるだけで、肝心の『〇〇』という書物自体は発見されていない、おそらく歴史の中で失われてしまっていて、本のタイトルだけしか残されていない、というものも沢山あります。

そのように、長い人類の歴史を振り返ってみた時、実は後世に残され伝えられた言葉の数よりも、むしろ残され伝えられることのなかった言葉の方が、圧倒的に多かったのではないかとさえ思います。あらゆるものを変化させ、同じ状態には決して留めておかず、風化させていくのが時間の流れというものです。そのような時間の中で、時に天災があり、また人災にも見舞われることがしばしばあります。それにも拘らず、そのような力に抗して、諦めることなく言葉を紡ぎ続け、語り続け、書き記し続けた人たちがいたからこそ、様々な言葉が今日まで受け継がれて来ているのでしょう。

今回の預言者エレミヤのお話も、そのようなお話の一つでした。時代は紀元前の6世紀頃の南ユダ王国です。この後の歴史の流れを知っている私たちにとっては、

北イスラエル王国の滅亡の後に、南ユダも続けて滅亡していくことは自明のことです。ですが、その渦中に生き、活動した預言者であったエレミヤ当人にとしてみると、「このままでは国が滅んでしまう」という状況の中で、神からの預言の言葉を一生懸命に、伝えれば伝えるだけ、迫害に次ぐ迫害を受け、それこそ命からがら、必死な毎日だったのだらうと想像します。

1 節からです。「¹ ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの治世第四年に、次の言葉が主からエレミヤに臨んだ。²『巻物を取り、私があなたに語った日から、すなわちヨシヤの時代から、今日に至るまで、イスラエルとユダ、およびすべての国々について、私があなたに語ってきた言葉を残らず書き記しなさい。³ ユダの家は、私が彼らに下そうと考えているすべての災いを聞いて、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。そうすれば、私は彼らの過ちと罪を赦す』」

神は、ユダの王と民とが悪の道から立ち返ることを期待して、エレミヤにこれまでに語って来た全ての預言の言葉を、巻物に書き記すように命じました。そしてエレミヤは弟子のバルクに、彼が口で語った言葉を、巻物に筆記させました。当時の「巻物」とは、現代のような紙による巻物ではなく、おそらく羊皮紙ですから、とても高価で、またサイズとしても大きく、重さも重たい重厚な物であったと思います。エレミヤはこれまでも王やその周りにいた神殿の祭司たちにとって都合の悪い、耳障りな預言ばかりをするということで、神殿への出入りが禁じられていたのかもしれませんが。彼は神殿に入ることが出来ませんでしたので、弟子のバルクが、完成した巻物を携えて「断食の日」に神殿に行き、そこで巻物に記された主の言葉を読み上げて、民に聞かせました。

その後、その言葉を聞いた王の側近である高官たちは、バルクを自分たちの所に呼び寄せて、改めて預言の巻物を読み聞かせるように命じました。そしてそれらの言葉を聞き終えた彼らは、王にもその言葉を聞かせることを決意しました（11-16 節）。しかし、「このまま主に立ち返ることなく、悪の道を進み続けるなら、この国は滅んでしまう」というような預言の言葉を、王が素直に聞き入れるかどうかは分かりません。高官たちはバルクから巻物を預かると、エレミヤと共に身を隠すように伝え（19 節）、自分たちで王に巻物の言葉を読み聞かせました。

22 節からです。季節は冬で、王の前には暖炉がありました。王は預言の言葉を聞きながら、腹を立てていたのでしょう。その巻物が読まれるそばから、巻物の羊皮紙を小刀で切り裂いて暖炉の火に投げ入れ続け、ついには巻物を全て燃やし尽くしてしまいました。さらに「バルクとエレミヤの二人を捕まえるように」との命令も出しましたが、高官たちによって二人は既に身を隠していましたので無事でした。そのようにして隠れ家にいた二人に対して、再び神の言葉が臨みました。「改めて、別の巻物を取れ。そして、ユダの王ヨヤキムが燃やした初めの巻物に記されていた言葉をすべて、それに書き記せ」(28)と……。つまり、「もう一回、同じことをやり直せ」と言われたわけです。エレミヤとバルクはどのように思ったでしょうか。

もしかすると、「あんな大変なことを、もう一回やり直すのですか。もう二度とご免です」と思ったかもしれません。また「なぜ、神様はヨヤキム王が巻物を燃やすことを止めなかったのですか。どうして燃やさせてしまったのですか」と文句を言ったかもしれません。ですが、最終的に二人は命じられた通り、もう一度、始めから同じ作業をやり直して、再び別の巻物を完成させたのでした。さて、このお話が、私たちに告げていることは何でしょうか。現代を生きている私たちは、今から約 2500 年以上も前に、預言者が巻物を書き直したというこのお話を、どのように受け止めることができるでしょうか。

それは「神の言(出来事)は決して無くならない」ということ。たとえ、燃やされ尽くして跡形も無くなってしまったとしても、決して失われることはなく、「神は民の救いを決して諦めない」ということ。再び預言者たちによって、もう一度神の言が成就するように働きかけられるということ。なのではないかと思います。「出エジプト記」によると、シナイ山にて神から「十戒」の記された石板を与えられたモーセは、山を下りた後、民の不正を目の当たりにして、その石板を壊してしまいましたが、神によって再び同じ石板が書き直されて与えられました(出エジプト記 32・34 章)。ここからも、「律法・神の教えは失われない」というメッセージが読み取れます。

同様に、この「エレミヤ書」でも、神の預言の言葉は焼かれても失われることなく、再び書き直されて形あるものにされる、ということが示されました。さらに、ここから

数百年後の紀元Ⅰ世紀に、生きた「神の言」としてお生まれになり、この地上を歩まれたイエス・キリストは、その生涯を十字架で閉じられましたが、その命は十字架の上では終わらず、お墓の中に納められても、そこで終わることはなく、引き起こされて今も、全ての命と共に生きて、働かれています。「神の言は決して終わらない」。命の神の力と働きは、どのような地上の権力によっても、人の手によっても終わりにすることは出来ない、のだと思います。

長年、心と時間を注ぎ込んで取り組んできたものが、ある日突然に失われてしまう、ということがあります。そのような時、私たちはそれを機に諦めることもできます。実際、年齢のためや経済的な理由など、様々な理由から、「諦める」という選択がなされることも少なくないだろうと思います。ですが、その一方では「何とかもう一度やってみよう」と思うことも選択肢の一つとしてあり得ます。もちろん、自分一人の力では無理かもしれないけれど、仲間たちと一緒にならば、励まし合い、支え合って、何とかやれるかもしれない。そのような「何とかやれるかもしれない」が積み重なり、連綿と連なり合って来たからこそ、人間社会の歴史は形作られて来たのだと思います。一見すると、「もう駄目だ」「もう諦めた方がいい」という時でも、それでも「諦めないで、もう一度やってみよう」と思えるのだとすると、それは何故でしょうか。そこには私たち一人ひとりのことを、決して諦めることのない神様が、共にいられて働かれているからなのではないかと思います。

様々な困難や、理不尽なことは、いつの時代にも多くあります。数年間や数十年間では成果が見られないこともあります。預言者エレミヤやイザヤに告げ知らされていた神の言は、彼らの後、数百年後にイエス・キリストとして現れました。いつの時代にあっても、神は命を諦めることは決してありません。命の神に支えられながら、私たちは今日もここから歩みを進めて参ります。